

都留市史

通史編

新参譜代の意識

谷村が幕府からいかに位置づけられていたのかははっきりしない。のちのことであるが、明暦三年（一六五七）の振り袖火事と俗称される江戸大火の際、時の藩主、秋元泰朝の子富朝は警備の密命を受けて谷村へ戻ったと、「秋元家譜原委私鈔集」は記している。谷村城は江戸城の西の守りと位置づけられていたのであろうか。この谷村へ、泰朝は都留一郡を与えられて一万八千石で入った。父長朝は一万石で、泰朝がそれまでに五千石を領し、元和八年（一六三三）の襲封で一万五千石、この入部で一万八千石となった（『徳川実紀』）。寛文四年（一六六四）、幕府が諸大名から関係書類を提出させ、いっせいに朱印状を発給した寛文印知でも、一万八千石である（近世I四四）。しかし、先の「秋元家譜原委私鈔集」など秋元家関係の史料では、都留郡は五万八千石くらいに相当する土地柄で、本高一万八千石の御朱印のほかに四万石の判物はんものが与えられたと記される。